

翻訳

許ムンミョン「韓日の真の和解のために」

(東亜日報国際部長、女性、『東亜日報』2015年12月15日)

世宗大の朴裕河教授の本『帝国の慰安婦』を知ったのは、本紙にコラムを連載中の若宮啓文・前朝日新聞主筆のコラムを通してだった。

彼は、2014年7月31日付け本紙のコラム「私も右翼の代弁者と呼んで」という多少、挑発的な(?)タイトルの文章で、『帝国の慰安婦』が韓国において名誉毀損で告訴され、優秀図書と指定されていた朴教授のまた別の本『和解のために』の指定を取り消せという動きがあるとの消息を聞き、「朴教授を右翼と呼ぶのなら、私も右翼と呼んで」と書いた。そして、2007年、朝日新聞が朴教授に賞(大仏次郎論壇賞)を与える時、論説主幹の資格で審査委員をしていて、「日本で賞を与えれば、朴教授に親日派という烙印が押されないかと憂慮し深思熟考した」と書いている。

若宮先生によれば、朴教授の本は一流知識人として知られている審査委員4名が皆、好評したという。日本人で初めて米国歴史学会の会長となり、日本の過去の侵略を叱責してきた入江昭ハーバード名誉教授の評はこうだったという。

「学問的な水準も高く、時事問題の解説としてもバランスがとれ、しかも読みやすい文章で書かれた、まれに見る優秀作である。……このような書物が韓国と日本で出版されたということは、両国関係の健全な発展のために喜ぶべきことである」

平素、若宮先生のコラムの愛読者として、また彼のバランスのとれた韓日観に信頼を寄せていた私は、日本人の文章を通して韓国人の本と存在を知ることになったことが恥ずかしくもあったが、誇らしい気もした。すぐに本を買って読まねばと思ったが、忙しい日常のなかで忘れてしまっていた。

そうして一年あまりして、朴教授を再度思い浮かべたのは、2日、「私は慰安婦ハルモニをおとしめるつもりはなかった」と主張する記者会見のためだった。急いで本を買いに教保文庫〔本屋〕に行ったが在庫はなかった。関連記事をすべて検索して、本が出た当時、酷評した言論が多かったことにまず驚き、まさに朴教授と本が苦境に陥るや、弁護する記事がぱっと減ったことに再度驚いた。

私は著者に直接会って、学者としての真正性を確認したかった。もしかしたら、極端に偏向していたり、人気(?)を得たいという欲から始めたりしたのではないかという疑心のためだった。もっぱら他人と違う考えを強調して目立ちたがる人間は一人二人ではない。二時間あまりの対話を通して、彼女の学者的良心と真摯さ、韓日関係を見る真正性に共感を覚えるようになり、彼女からもらった本二冊もじっくり読んだ後、インタビュー記事を掲載するに至った。

記事が出た後、韓日両国の知識人からの称賛と激励も多かったが、とうてい口にはできない悪口とともに、「親日記者」「慰安婦ハルモニを傷つけた記者」にはじまって、「告発する」という内容のメールもたくさん届いた。法と共同体の秩序を毀損してまで思想と表現の自由を主張する人が多い韓国社会で、公益と善意の観点で感情を押し立てるよりも理性と論理を押し立てようという声がこのように罵倒されるのかと複雑な思いがした。あらためて、朴教授が直面している状況が理解され、憐憫の感情まで抱いた。

繰り返し言うが、朴教授の本のどこにも、ハルモニを傷つけようとかおとしめようとかという意図は見られない、というのが私の見解だ。むしろ私は、本を読んで、この間忘れていたハルモニたちをより深く理解し、解決策のために真剣に悩むようになった。

『帝国の慰安婦』の裁判が韓日関係の未来を真摯に考える機会になればと思う。繰り返すが、学者の良心に法のものさしをあてはめることはできないのである。

(李順愛訳)